

お笑い文庫¹²

弥次さん 喜多さん

山田野理夫・作 矢玉 四郎・絵



お笑い文庫12

弥次さん 喜多さん

山田野理夫・作 矢玉 四郎・絵



913.6	やま	だ の り お
	山	田 野 理 夫 作 弥次さん 喜多さん お笑い文庫⑫ 太 平 出 版 社 1977 P 166 22cm

山田野理夫 やまだ のりお 1922年仙台に生まれる。作家・歴史家。日本文芸家協会・日本ペンクラブ会員。第六回農民文学賞受賞。おもな著書に「おばけ文庫」全12巻、『天にかえったジュリア』(以上 太平出版社刊)、『花と愛の民話』『伊達政宗』などの児童書のほか、『キリシタン研究』『東北怪談集』『喜田貞吉』などの著書が多数ある。

矢玉 四郎 やだき しろう 1944年大分県に生まれる。千葉大学工学部卒業。マンガ家をへて、72年ころより幼年童話、作詩の創作活動にはいる。児童出版美術家連盟所属。さし絵も自分で担当している。おもな児童書に『おしおれの中のみこたん』『どこでもでんしゃ』などがある。

弥次さん 喜多さん
お笑い文庫⑫

母と子の図書室 34-49

1977年10月30日 第1刷発行

¥960

著 者 山 田 野 理 夫

発 行 者 崔 容 徳

東京都千代田区神田神保町1-46-2 美成社ビル

株式会社 太 平 出 版 社 ©

電話03-295-3531 振替東京1-99563

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

ふりわけ荷物に旅笠

おなじみ弥次さん・喜多さんのふたり

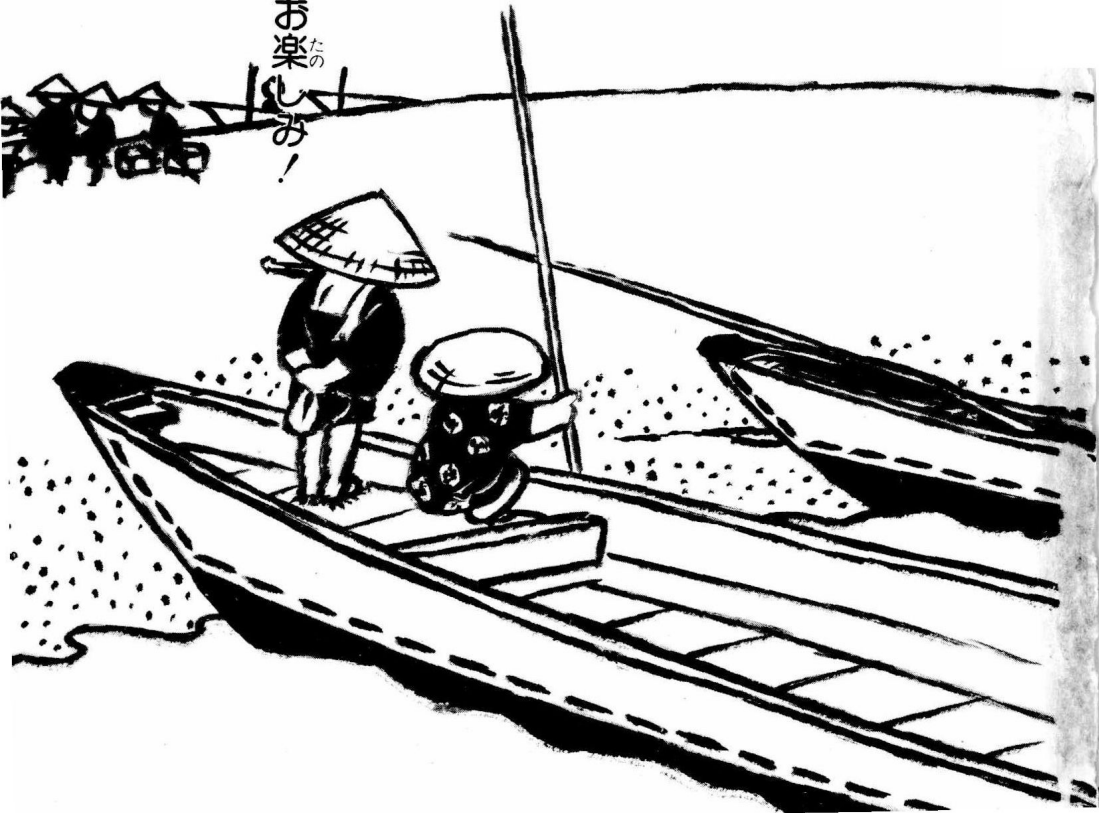
花のお江戸は日本橋をふりだしに

東海道を漫遊の旅にでます。

道中にくりひろげる

笑いのうずまき……

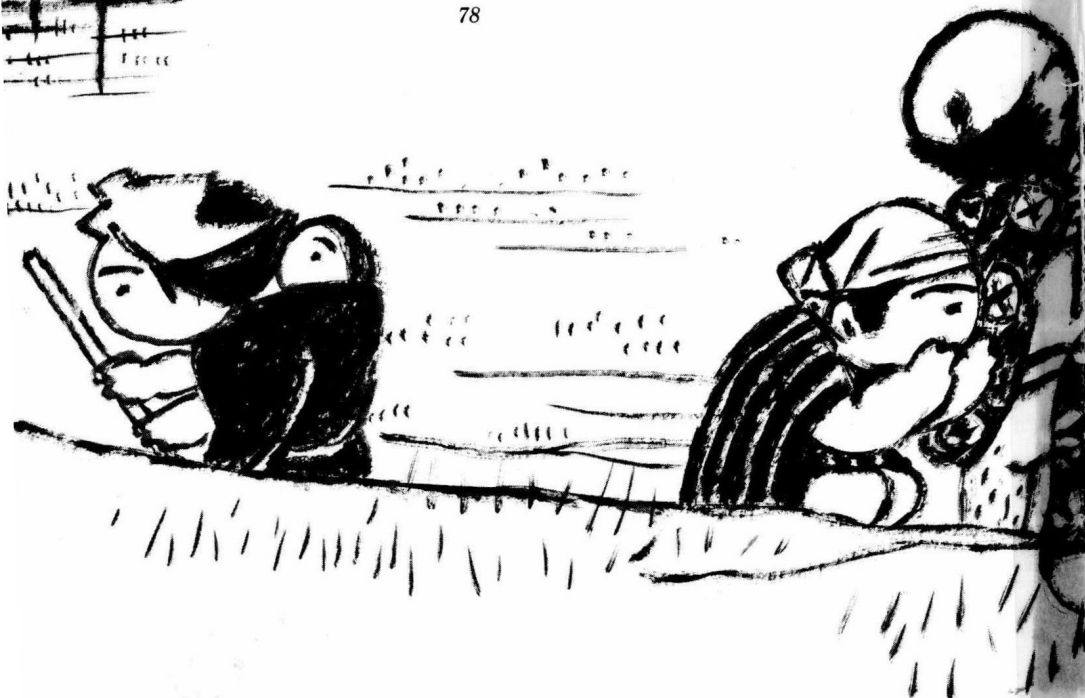
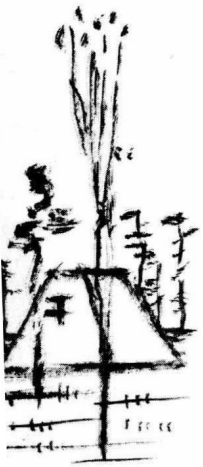
お笑い文庫（全12巻）のさいごのお楽しみ！

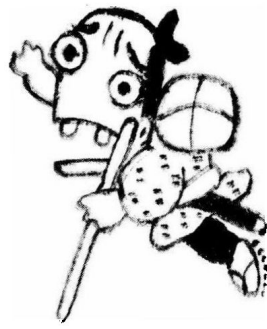


お笑い文庫⑫ 弥次さん 喜多さん もくじ

『東海道中膝栗毛』へのご招待 10

二百八十八番めのはなし	東海道底ぬけ道中	14
二百八十九番めのはなし	スッポンそうどう	34
二百九十番めのはなし	ヌカダンゴ	52
二百九十一番めのはなし	カゴはいきます東海道	66
二百九十二番めのはなし	トンビにぼた餅さらわれた	78
二百九十三番めのはなし	婚礼の宿	100
二百九十四番めのはなし	渡し舟	126
二百九十五番めのはなし	やけどハマグリ	145
	あとがき	163





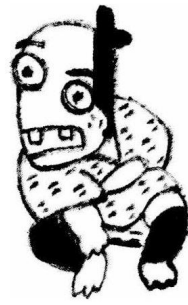
『東海道中膝栗毛』へのご招待

みなさんは、いちどは「弥次さん・喜多さん」という名まえを聞いたことがあると思います。

このふたりは、江戸時代の作家・十返舎一九が書いた『東海道中膝栗毛』の主人公です。この作品は、弥次郎兵衛と喜多八のふたりが江戸をあとに東海道を旅する話ですが、宿場宿場を舞台にくりひろげられる、ふたりのこっけいな活躍は、すっかり当時の人たちの心をとらえてしまいました。

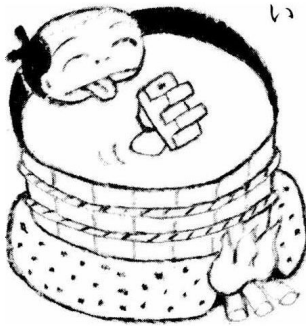
そそっかしくて、のんきで、こっけいな弥次さんと喜多さんは、つぎからつぎへとおもしろい事件に出会っては、失敗をかさねます。このふたりは、きつとわたした





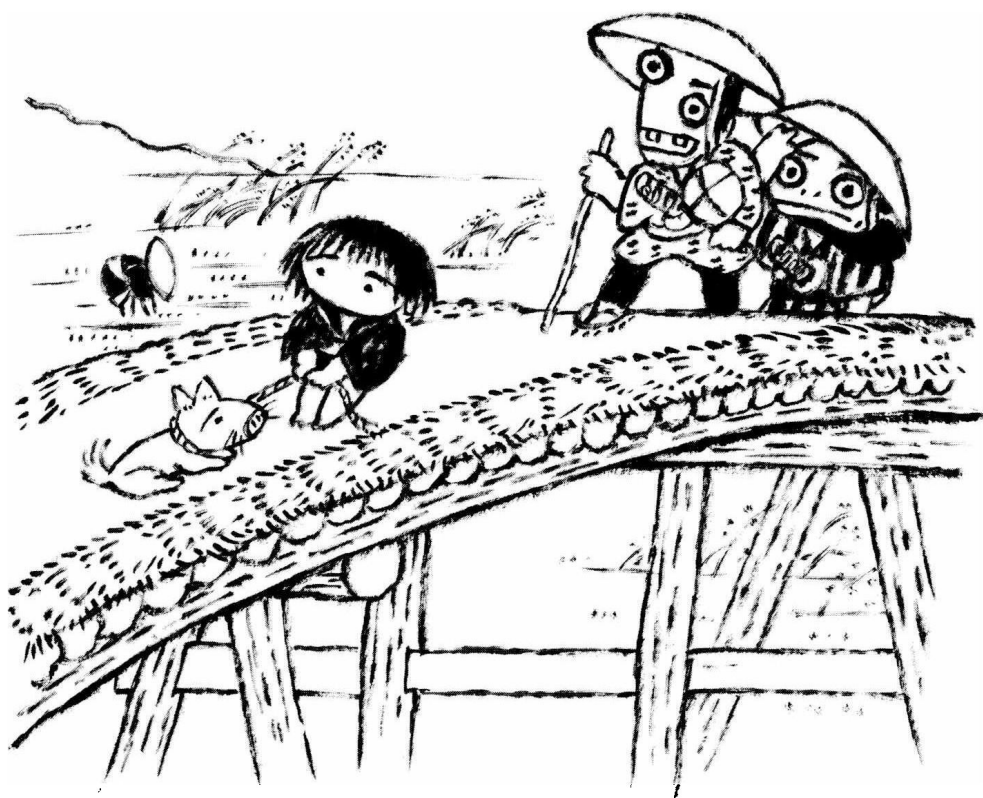
ちのまわりの、どこにでもいそうな人たちなのです。そして、ふたりをとりまくのも、旅のとちゅうで出会うカゴかき、馬子、巡礼、商人、侍、宿屋の女中、茶屋の主人など、ごくありふれた人たちです。これらの人たちと弥次さん・喜多さんとのこっけいな会話のやりとりが、この作品のおもしろさの中心になっています。

そういうところは、お笑い文庫第六巻『ものまね山伏』のような狂言のおもしろさと、たいへんよくにっています。(じつさいに作者の一九は、狂言からたくさん材料をとっています)。登場人物のことばづかいや身ぶりを思い浮かべながら、ぜひ読みくらべてみてください。



弥次さん 喜多さん

山田野理夫・作 矢玉 四郎・絵

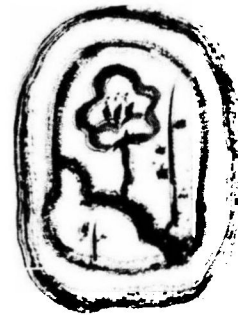


太平出版社 母と子の図書室

お笑い文庫12

二百八十八番めのはなし

東海道底ぬけ道中



それいけ東海道

おなじみの、弥次喜多道中の話でございます。

江戸（いまの東京）は神田の、八丁堀あたりの長屋に、ひとりものの弥次郎兵衛という男が住んでおります。そこに居候しておりますのが、喜多八でございます。ふたりとも、なまけものでございます。

ある日、弥次さんが喜多さんに、

「こうしていても、つまらない。ひとつ、花のお江戸から梅のなにか（大阪）へ、旅にでかけないかい。」

と、話しかけました。

「それは、いいかんがえだ。よからう。」

と、喜多さんは、うれしそうにへんじをしました。

そこで、弥次さんは、家にある品物をお金にかえて、風呂敷につつみ、したくをはじめます。

まず、お寺にいつて、旅にでてもいいという、「往來の切手」（証明書）をもらいます。それから、長屋の大家さんに借金をはらいまして、箱根と新居の関所をとおるときの、「御関所の手形」をうけとりました。この手形があれば、関所をとおれるのでございます。

やがて、ふたりはしたくがととのいました。ふりわけ荷物を肩にかけ、旅笠をかぶり、わらじをはいて、江戸の日本橋から東海道へ旅立っていききました。

といつても、酒屋と米屋には借金をはらわずに、かけだしたのでございます。

弥次さん、喜多さんは、はや品川をすぎて、鈴ヶ森（いまの東京都品川区大井鈴ヶ森町）にさしかかりました。鈴ヶ森は、そのころ、処

刑をおこなうところでございます。

弥次さんが、

「喜多さんよ。ここはなぜ鈴ヶ森というのか、知っているかい。首を切られる罪人の首に、鈴をつけるからさ。」
と、いいました。

それから、六郷川の渡しをこえまして、万年屋という茶屋にたちよりました。万年屋の名物は、茶飯（葉茶の汁でたいて、塩で味つけた飯）でございます。

茶屋の女が、

「おはようございやす^(ます)。」

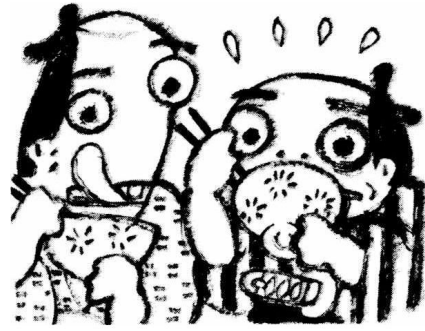
と、あいさつをしました。

「茶飯を、ふたり分たのみますよ。」

と、弥次さんがいいました。

店の中を、きよろきよろみておりました喜多さんは、

「弥次さん、あれをみなよ。床の間に、かけてある掛物。あれは、な



「んだい？」

「あれは、コイの滝のぼりだよ。むかしから、いうだろう。コイは滝をのぼって竜になり、天をとぶって。」

「へー。おれは、フナが、そうめんを食ってるのかとおもったよ。」

「喜多さん、むだなことをいってないで、はやく食いなよ。汁がさめるぞ。」

喜多さんは、茶飯をサラサラッと、たいらげてしまいました。

「ああ、うまかったな。」

「うまかった。」

「弥次さん。また、どっかで、うまいものを食おうよ。」

と、ふたりは茶屋をでていきました。

それから、戸塚の宿にとまりまして、つぎの日は、藤沢の宿にやってまいりました。

ふたりは、藤沢名物のダンゴをたべようと、茶屋にはいりました。おばあさんが、まっ赤な炭火でダンゴをやいております。

「ダンゴをくれ。」

「はい、はい。」

と、おばあさんが、クシにさしたダンゴを四、五本お盆おぼんにのせて、はこんできました。

弥次やじさんが、ひよいとみると、一本のダンゴにまだ炭火すみびがついております。その火のほうをわざとかくしまして、

「喜多きたさんよ。ダンゴは、あついのがいいだろう。」

「ああ、ダンゴはあついのにかぎるさ。」

「それなら、こっちのダンゴがいいよ。」

と、炭火がついたダンゴを、喜多さんにわたしました。

喜多さんは口を大きくあけて、ダンゴをいれますと、

「アチッ！ アチチチチッ、アツ、ツツツツツ……。ばあさん、

とんだ目にあわせやがった。ダンゴに、火がついているじゃないか。」

弥次さんが、

「ハハハハハ。喜多さん、いま、ダンゴはあついのにかぎる、と、い

つたろう。』

と、からかいました。

「ペッ、ペッ！」

喜多さんは、たいへんくやしそうでございます。

ふたりは、茶屋ちややのばあさんにお金をはらって、でかけます。

道の両側りょうがわの茶屋の女たちが、口をそろえて、弥次さん、喜多さんに、

「お休みなさいやあし。お酒さけも、ござりやあす。」

と、声をかけております。

カゴかきたちも、

「カゴは、よしいらぬいかぬかの。もどりカゴだ。やすくいきましよう。」

と、よんでおります。

のどかな、春の日でございます。

弥次さん、喜多さんは、そんなよび声こゑもきこえないかのように、ねむそうな顔かおをしてあるいております。

「弥次さん、あんまりたいくつで、ねむくなるよ。ひとつ、なぞかけ

をしなごらいこうか。」

「喜多さん、それはいい。おまえから、はじめな。」

「よし。そんなら、そとは白壁、中はメラメラ。それは、なあに？」

「つまらないなぞだ。そんなの、行燈にきまつているだろう。こんどは、おれがなぞなぞをだそう。」

「いいとも。」

「喜多さん。おまえとおれとつれだつていく、と、かけて、なんととく。」

「わかつているさ。お伊勢（伊勢神宮）まいりをして、なにわ（大阪）へいく、と、とくさ。」

「喜多さん、ばかだな。これを、馬二頭、と、とくのさ。」

「へー、なぜだい？」

「お馬も、ドウドウ。ふたりであるくのも、どうどう（同道）だからさ。」

「なるほど。そんなら、おいらふたりの国所（うまれ故郷）とかけて、



なんととく。」

「そんなことか。神田の八丁堀さ。」

「弥次さんは、しやれがわからないよ。これは、豚二頭、イヌころ十匹、と、とく。」

「なぜだい？」

「そのころは、ふた二（ふたり）とも、きやん十もの（関東者）だからさ。」

「そんなひどいなぞなぞが、あるもんか。」

やがて、ふたりは酒匂川をこえまして、小田原の宿にはいつてまいりました。

道には、宿屋の女中さんや番頭さんがまちうけて、旅の人に声をかけております。

「さあ、お宿はこちらでござります。もしもし、そこをゆく、おふたりさん。おとまりでござりますか。」

「どうぞ、わたし方におとまりくださりませ。」